

平昌五輪を目指す 注目のアスリート

盛岡広域スポーツコミッションが推進する、オリンピックク選手
の輩出を目指す「エイト・オリンピックズ・プロジェクト」。シ
リーズ第5回目は、平昌オリンピッククでの飛躍を誓う兄弟
ジャンパーの思いを紹介する。



飛ぶ鳥を落とす勢いで、飛躍を続けるのが小林潤志郎だ。今年8月の国際大会・グランプリ白馬（長野）で連勝。続く11月4日の全日本選手権（札幌）で初優勝、そし

あの日見た長野五輪。
今度は自分が感動を与える番だ



小林潤志郎

小林潤志郎 [こばやし・じゅんしろう]

1991年6月11日生まれ。八幡平市出身。168cm。小学2年生から野球をはじめ、小学5年から本格的にクロスカンントリー競技をはじめ。盛岡中央高校3年の2010年1月の世界ジュニア選手権の複合個人スプリントで日本人2人目の優勝。東海大札幌2年時の2011-12年シーズンよりジャンプに転向。2014年、雪印メグミルクに入社。



小林陵侑

小林陵侑 [こばやし・りょうゆう]

1996年11月8日生まれ。八幡平市出身。174cm。松尾中学校から盛岡中央高校へ進み、卒業後は土屋ホームに所属。全中2冠をはじめ、学生時から数々の大会で優勝。社会人になると同時にジャンプに専念し、今季も各大会で上位につけるなど好調を維持している。

葛西紀明の薫陶を受けた若武者が
憧れる夢舞台での活躍を誓う

す」と、潤志郎は感謝する。

今季、初勝利を挙げた白馬ジャンプ台は潤志郎の原点だった。日本中が歓喜した98年長野五輪、ラージヒル団体で金メダルを獲得するなど、メダルラッシュに沸く会場で潤志郎は家族と観戦していた。当時、7歳。幼心にも空中を何度も飛び交うジャンパーに目を輝かせた。あれから約20年――。今は長野五輪で7歳だった潤志郎に感動を与えた原田雅彦（現・雪印メグミルク監督）、岡部孝信（同コーチ）のもとで指導を受けている。「今度は自分が子どもたちに勇気を与える番、支えてくれた人たちのためにも、五輪出場という形で恩返ししたい。できれば、僕だけではなく、弟の陵侑と2人で団体戦に出場できれば」。平昌

五輪はもう目前。今季、初勝利を挙げた思
いの地で、潤志郎の挑戦ははじまった。

◆ 弟の陵侑は「いわてスーパークィーズ」出



身のジャンパー。5歳のころにスキーをはじめ、小学校1年生で初めてジャンプを経験した。以来、地元である八幡平市の田山スキー場は彼にとつてのホームグラウンドともいえる場所となる。熱心な指導者と仲間たち。彼らとともに腕を磨いた陵侑は早くから頭角を現していく。2012年の全日本中学校スキー大会では、史上2人目となるジャンプと複合の2冠を達成。団体でもコンバインドで連覇を果たすなど、国内屈指の実力を持つ兄の潤志郎、ユニバーシアード代表経験を持ち現在はCHINAFALSキー部に所属する姉の論果に勝るとも劣らない結果を残した。

陵侑は盛岡中央高校を卒業後、土屋ホームの門戸をたたいた。その名をジャンプ界

て11月20日のW杯個人第1戦（ポーランド・ビスワ）では、1回目に124メートルで2位タイにつけると、2回目も126・5メートルと飛距離を伸ばして初優勝を飾った。「春からはじめてきた練習が、やっと実を結んできたかな。自分にも自信を持っている。白馬で勝てたことが一番大きいと思います」。それが、26歳の本音だった。

苦しみ抜いてきた。平昌五輪プレシーズンだった昨年。W杯出場はわずか8試合に終わった。予選敗退も多く、「ポイントも全然獲れず、苦しかった」。目前に迫る大舞台に焦り、自分を見失いかけた。何かを変えないと――。潤志郎は決断した。例年は6月から飛びはじめていたが、今年は2か月早めて4月からスタート。トレーニングも測定器を導入し、目に見える体力アップで自身に自信を付けてきた。だが、体重1キロ増えるだけで、飛距離が2メートルも落ちると言われる繊細なジャンプ競技。これまでのルーティンを変えることはある意味、潤志郎にとっては賭けだった。それでも、「今年には五輪シーズン。もう思い切って練習法も変えた。それで失敗したら、しょうがない」。最後の勝負に出たことが功を奏し、今季の好調につながっている。

中学3年まではスキーと野球の両方を続けていたが、高校から悩んだ末に複合一本に専念。盛岡中央高校スキー部に複合競技の選手は潤志郎1人だったが、支えてくれたのが当時、顧問の開正夫先生だった。開先生自身は競技経験こそなかったものの、1人練習に励む潤志郎を精神面でサポート。高校3年時には、世界ジュニア選手権個人スプリントで、日本人2人目となる金メダルを獲得するなど、二人三脚で成長してきた。進学した東海大札幌2年時にジャンプに転向する際、相談に乗り背中を押してくれたのも開先生だ。「高校時代があったからこそ、今の自分がある。僕の恩師で

だけでなくスポーツ界全体に広く名を轟かせる、葛西紀明選手兼監督が所属するチームとしても知られる名門だ。

「本当に素晴らしい環境でトレーニングさせてもらっています。葛西さんという最高のお手本、最大の目標となる人と一緒にできることはすごく大きいです。競技への向き合い方やトレーニング方法はもちろんなんですけど、葛西さんはどんなスポーツをやってもうまい。合宿ではサッカー、テニス、バレーなどをやる機会もあるんですけど、全部うまい。素直にすごいと思わされます」

入社後は純粋なジャンパーに転向した。恵まれた環境の中でポテンシャルはさらに開花する。今季も好調を維持しており、11月の伊藤杯大倉山サマージャンプでは最長不倒の132・5メートルを記録し優勝するなど、数々の大会で表彰台に輝いている。「今はウエイトトレーニングを重点的にを行っています。食事や栄養面に関しては、いわてスーパークィーズのときに教えてもらった知識がすごく役立っています」

今では世界最高峰の舞台も経験している日本ジャンプ界のホープに成長。オリンピック出場にも手が届く位置にいる。「いつかあの舞台に立つて、表彰台に立つぞという思いでいましたし、そのチャンスになる平昌オリンピックが近づいてきているので、出場して活躍をみせて、岩手の活力になりたいと思っています」

潤志郎同様、陵侑もその大舞台に立つ可能性は十分にある。兄弟での出場となれば、冬季オリンピック、またジャンプ競技の注目度が上がることは間違いない。大きな期待は時に重圧にもなる。しかし、そこに身を置くことこそが心身の加速的な成長にもつながるはずだ。兄とともに夢の舞台への切符を手に入れることができるかどうか。この冬は岩手が生んだ2人の兄弟ジャンパーから目が離せない。